

第10章

教育観

- 第1節 授業や生活指導で大切にしていること
- 第2節 PISAに対する認知
(木村 治生)

序章

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

第6章

第7章

第8章

第9章

第10章

第11章

資料編



第1節

授業や生活指導で大切にしていること

この10年で、子どもの個性や自主性を尊重しようという意向や、教員は子どもをサポートする役割を担うべきだという意識が弱まった。それに代わり、学問的な重要性を考慮し、決められた範囲をきちんと教えて、その成果を客観的に評価するべきだという考え方が支持されるようになった。【Q12(教員)】

本章では、教員たちがどのような教育観をもっているか、それが経年でどう変化しているのかを検討したい。

1) 小学校教員の教育観の変化

最初に、授業や生活指導面でどのようなことを大切にしているかについてたずねた結果をみてみよう。この質問では、2つの対になる教育観のうち、あえていえば重視していると思うほうを選んでもらった。図10-1-1は、小学校教員の回答について、98年調査と07年調査を比較する形で示している(02年調査ではたずねていない)。

すべての項目を概観すると、10対の項目のうち8対の項目で10ポイント以上の変化があり、この9年で教員の教育観が大きく変わった様子が表れている。増減がもっとも大きいのは、「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」(42.8%→72.0%、29.2ポイント増)と「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」(55.6%→25.6%、30.0ポイント減)である。98年調査では、半数以上の教員が得意な教科の学力を伸ばすことを重視していたが、そうした志向が大きく減り、07年調査では7割が不得意な教科の学力を伸ばすほうを重視するようになった。

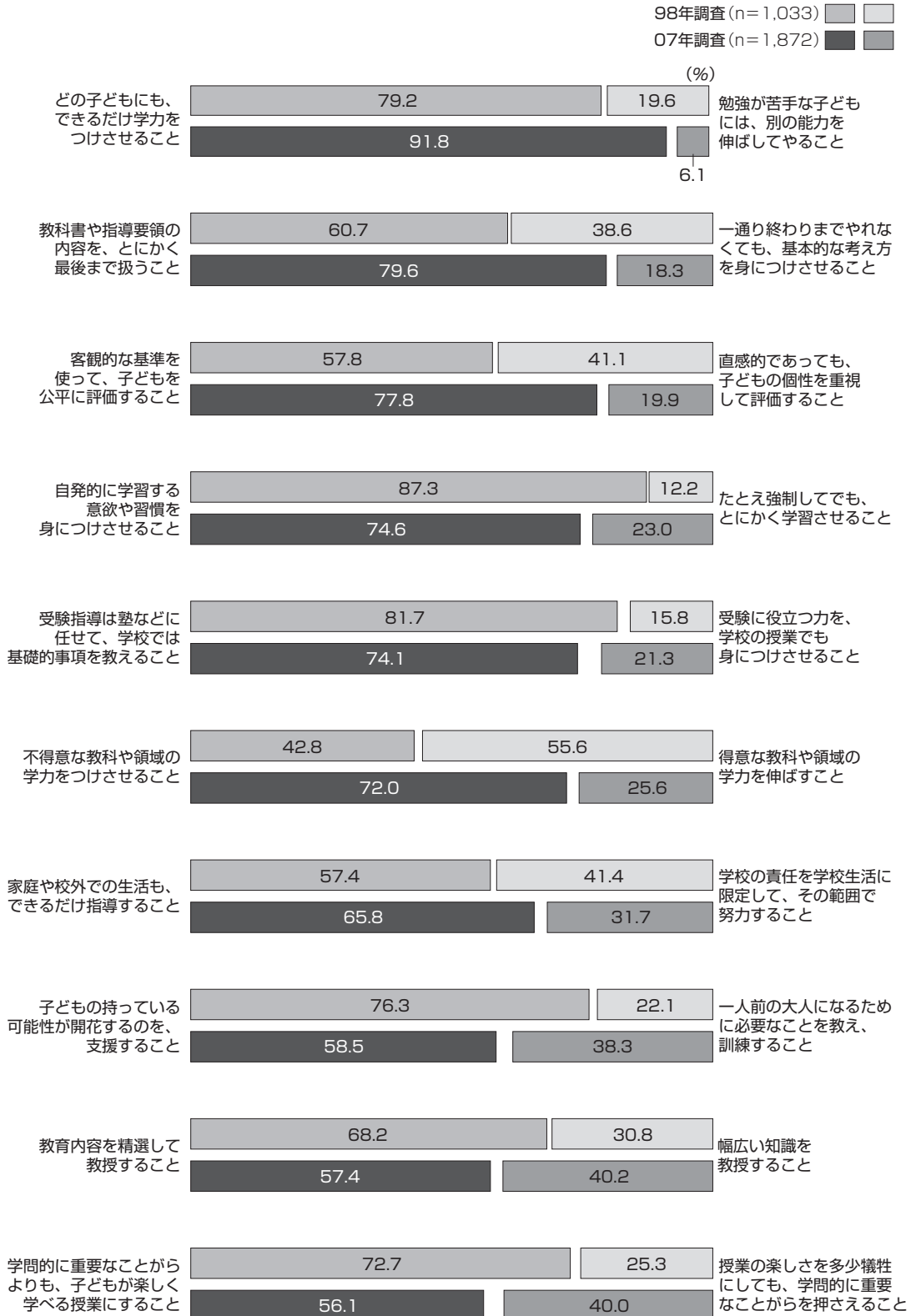
これと同様に、9年間で増減が大きい項目を確認しよう。

「客観的な基準を使って、子どもを公平に評価

すること」(57.8%→77.8%、20.0ポイント増)が増え、「直感的であっても、子どもの個性を重視して評価すること」(41.1%→19.9%、21.2ポイント減)が減った。7章で確認したように、通信簿の「学習の記録」で9割を超える学校が「観点別学習状況の評価」を取り入れているが、絶対評価になって観点ごとの客観的な評価が強く求められるようになってきているのだろう。さらに、「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」(60.7%→79.6%、18.9ポイント増)と「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」(38.6%→18.3%、20.3ポイント減)も20ポイント程度の変化がある。学習すべき内容を最後まで扱うことを選択する教員が、8割近くになっている。

また、「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」(22.1%→38.3%、16.2ポイント増)と「子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること」(76.3%→58.5%、17.8ポイント減)の項目や、「授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことがらを押しさえること」(25.3%→40.0%、14.7ポイント増)と「学問的に重要なことがらよりも、子どもが楽しく学べる授業にすること」(72.7%→56.1%、16.6ポイント減)の項目の変化にみられるように、子どもの楽しさよりも教えるべきことをきちんと教えるべきだという姿勢が強まっている

図10-1-1 教育観（小学校教員／経年比較）



注) 対になる項目のいずれか1つを選択。数値は選択された比率を示す。「無答不明」があるため、左右の項目の合計が100%にならない。

ことがわかる。

全体に、子どもの個性や自主性を尊重しようという意向や、教員は子どもをサポートする役割を担うべきだという教育観が弱まっていることが読み取れる。それに代わって、楽しさよりも学問的な重要性を考慮し、決められた範囲をきちんと教えて、その成果を客観的に評価すべきだという考え方が支持されるようになった。学習指導要領が改訂された2002年以降にとられている「確かな学力」向上のための施策や、教員に求められるさまざまな社会的要請が、教員の教育観に影響を与えていると考えられる。また、8章で述べたように、教員の勤務が多忙になり、子どもと向き合う時間を確保することが難しくなっている。そうした余裕のなさが、個々の子どもの良さを伸ばすよりも、学力向上により効果があると思われる指導方法を優先する志向につながっているのかもしれない。

2) 中学校教員の教育観の変化

次に、中学校教員の教育観がどのように変化しているのかを確認しよう。図10-1-2は、中学校教員の結果を示している。これをみると、数値は異なるものの、増減の様子は小学校教員の結果とよく似ている。なお、中学校教員は、97年調査と07年調査の10年間の変化である（02年調査はたずねていない）。

「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」（37.4%→61.7%、24.3ポイント増）は、97年調査では4割に満たなかったが、07年調査では6割を超えた。これにともなって、対になる「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」（61.2%→35.4%、25.8ポイント減）が大きく減少している。「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」（51.3%→72.9%、21.6ポイント増）と「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」（48.4%→24.8%、23.6ポイント減）も20ポイント以上の大きな増減があった。この10年の間に、指導す

べき内容をすべて扱い、不得意な教科についても学力をきちんと身につけさせようとする意識が強まっていることがわかる。

また、「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」（42.8%→61.8%、19.0ポイント増）に対する支持が半数を超えるようになったのに対して、「学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」（56.6%→35.3%、21.3ポイント減）は4割を下回った。子どもの教育に対する責任を、校外の生活にまで広げて考える教員が増えている。

このほか、「どの子どもにも、できるだけ学力をつけさせること」（66.5%→85.6%、19.1ポイント増）と「勉強が苦手な子どもには、別の能力を伸ばしてやること」（32.8%→11.9%、20.9ポイント減）、「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」（38.9%→54.5%、15.6ポイント増）と「子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること」（59.3%→42.5%、16.8ポイント減）などの項目の変化も大きい。中学校の教員も、子どもの自主性にまかせて、その子がもつ良さを個性を伸ばそうという志向が後退している。それに代わって、教員自身が責任範囲を広げ、その子にとって苦しい内容であっても定められた学習内容をきちんと指導し、一定の学力を保障しようとする姿勢を強めている。

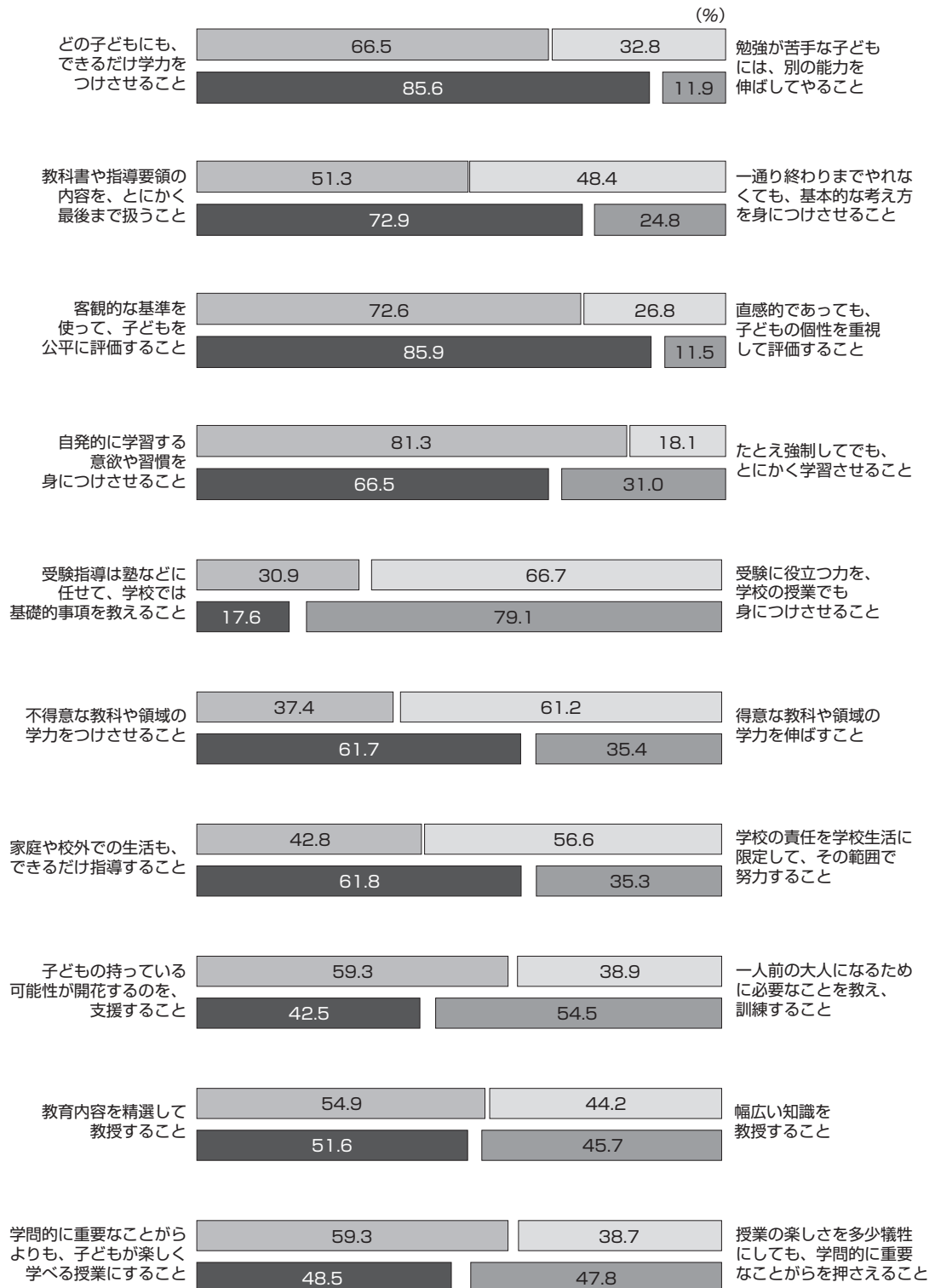
3) 小学校教員と中学校教員の違い

およそ10年の間にみられた教育観の変化の傾向は、小学校教員も中学校教員もとてもよく似ている。それでは、それぞれのもつ教育観で、異なる点は何だろうか。ここで、07年調査の結果をもとに、両者の違いについて触れておきたい。

もっとも大きな違いがみられたのは、受験を意識した指導に関する項目である。中学校教員は、「受験に役立つ力を、学校の授業でも身につけさせること」（小学校教員21.3%<中学校教員79.1%、以下同）を約8割の教員が支持している

図10-1-2 教育観（中学校教員／経年比較）

97年調査 (n=938)
 07年調査 (n=2,109)



注) 対になる項目のいずれか1つを選択。数値は選択された比率を示す。「無答不明」があるため、左右の項目の合計が100%にならない。

のに対して、小学校教員は2割である。これに対して、「受験指導は塾などに任せて、学校では基礎的事項を教えること」(74.1%>17.6%)は、小学校教員の支持が多い。このように、中学校教員は受験を意識した指導を心がけていることが読み取れる。ただし、質問項目中の「受験」の意味が、両者にとって異なることに留意しておくべきだろう。中学校教員にとってはほとんどの生徒が受ける高校受験を示しているのに対して、小学校教員にとっては一部の児童のみが受ける中学受験を意味していると考えられる。もし仮に、同じ高校受験を想定して回答していたとしても、小学校教員が授業のなかで受験指導を意識することは、少ないだろう。

次に大きな差があったのは、「子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること」(58.5%>42.5%)と「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」(38.3%<54.5%)の項目である。小学校教員は、「支援する」というスタンスが強いのに対して、中学校教員は「訓練する」ことを重視している。また、中学校教員は、「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」(23.0%<31.0%)、「授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことがらを押さえること」(40.0%<47.8%)などについても選択する比率が高く、子どもにとって必要なことは強制してでも教えるべきという意識が強いことがわかる。

表10-1-1 教育観（中学校教員／担当教科別）

(%)

	全体 (n=2,109)	国語 (n=390)	社会 (n=398)	数学 (n=492)	理科 (n=407)	外国語 (n=406)
1.教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと	72.9	40.8	75.1	82.9	87.7	75.1
2.一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること	24.8	57.7	22.9	13.0	10.6	23.2
1.不得意な教科や領域の学力をつけさせること	61.7	63.6	55.5	69.3	59.5	60.1
2.得意な教科や領域の学力を伸ばすこと	35.4	34.6	42.5	25.8	38.6	36.9
1.自発的に学習する意欲や習慣を身につけさせること	66.5	61.8	70.6	64.0	68.1	68.2
2.たとえ強制してでも、とにかく学習させること	31.0	36.4	27.6	31.1	30.5	29.6
1.教育内容を精選して教授すること	51.6	56.9	48.7	52.6	42.5	57.1
2.幅広い知識を教授すること	45.7	40.8	49.5	42.5	56.0	40.6
1.客観的な基準を使って、子どもを公平に評価すること	85.9	85.9	88.2	85.0	85.0	86.2
2.直感的であっても、子どもの個性を重視して評価すること	11.5	12.3	9.8	10.6	13.5	11.6
1.学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること	35.3	34.9	41.2	32.1	37.3	32.0
2.家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること	61.8	63.3	56.5	62.6	60.9	65.0
1.どの子どもにも、できるだけ学力をつけさせること	85.6	90.3	84.9	85.0	85.3	83.5
2.勉強が苦手な子どもには、別の能力を伸ばしてやること	11.9	7.9	13.1	10.8	13.0	14.5
1.学問的に重要なことからよりも、子どもが楽しく学べる授業にすること	48.5	42.6	54.0	40.2	52.1	54.4
2.授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことからを押さえること	47.8	54.1	42.5	54.3	46.4	41.9
1.受験に役立つ力を、学校の授業でも身につけさせること	79.1	82.1	76.1	79.3	79.6	79.1
2.受験指導は塾などに任せて、学校では基礎的事項を教えること	17.6	15.1	20.6	15.9	18.7	18.2
1.子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること	42.5	40.0	39.9	42.5	44.7	44.6
2.一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること	54.5	57.7	57.5	53.0	53.1	52.7

注1) 濃い網掛け(白抜き数字)は全体から10ポイント以上高いもの、薄い網掛けは5ポイント以上高いものを示す。

注2) 「無答不明」は省略した。

4) 指導する教科による教育観の違い

ここでは、中学校教員の結果をもとに、指導する教科の違いによって教育観も異なるのかを確認しよう(表10-1-1)。

国語を担当している教員は、「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」よりも、「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」を重視する傾向がある。他の教科では7割以上が「とにかく最後まで扱う」を選択しているのに対して、国語の教員は4割にとどまっている。このほか、「たとえ強制してでも、とにかく学習させること」「教育内容を精選して教授すること」「授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことがらを押さえること」の3項目で、他の教科よりも選択率が高い。基礎的な内容を精選して、それをきちんと身につけさせることが大切だという思いが読み取れる。

社会を担当している教員は、他の教科の教員に比べて「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」を選択する比率が高く、「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」の比率が低い。さらに、「学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」「学問的に重要なことがらよりも、子どもが楽しく学べる授業にすること」を選択する教員が多い。生徒の得意や関心などに引きつけて、楽しく授業をすることを重視する傾向があるようだ。

数学を担当している教員は、「教科書や指導要

領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」「授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことがらを押さえること」を選択する比率が高い。学習内容の系統性が高いので、不得意であったり、楽しくなかったりしても、指導すべき内容を最後まで教えるという姿勢が強いことがわかる。

理科を担当している教員も、数学の教員と同様に「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」を重視しており、9割弱が選択している。それに加えて、「教育内容を精選して教授すること」よりも「幅広い知識を教授すること」を選択する教員が多い。子どもたちの理科離れが指摘されて久しいが、教員には生徒の知識が不足しているという思いがあり、それを身につけさせるべきだと考えているのかもしれない。

外国語を担当している教員は、「教育内容を精選して教授すること」と「学問的に重要なことがらよりも、子どもが楽しく学べる授業にすること」の2項目で、他の教科の教員よりも選択率が高い。精選した基礎的事項を、生徒が関心のもてる素材を用いて楽しく学ばせようという意識をもっている。

このように、担当している教科によって教育観の一部に違いが生じていることがわかる。その教科がもっている特性に応じて、指導のなかで重視することが異なるのであろう。

5) 教職経験年数による意識の変化

教育観は、教職経験の程度によっても変わるのである。教職について問もない教員、中堅として学校運営の中心を担う教員、教職に長く就いているベテラン教員では、それぞれ教育についての意識が異なるものと推察される。その様子を、いくつかの項目を手がかりに検討してみたい。

① 経験年数とともに増加／減少する項目

まず、教職経験年数を重ねるにつれて増加、もしくは減少する項目に注目しよう(図10-1-3)。

小学校教員も中学校教員もともに、「幅広い知識を教授すること」は経験年数を経るにつれて減少し、これに代わって「教育内容を精選して教授すること」を選択する比率が増加する。ベテランになると、幅広い内容よりも精選した内容を教えることを重視するようになる。同様に、「家庭や校外での生活も、できるだけ指導すること」は年数とともに減少する一方で、「学校の責任を学校生活に限定して、その範囲で努力すること」は増加する。教職経験年数が短い教員はより広い範囲で子どもの指導しようという思いが強いのにに対して、年数を経るほど限定した範囲でベストを尽くすことを意識するようだ。

さらに、小学校の「5年目以下」の教員は例外であるが、「不得意な教科や領域の学力をつけさせること」は減少し、「得意な教科や領域の学力を伸ばすこと」は増加する。経験年数の短い教員は子どもの苦手であっても、きちんとした学力をつけさせることを大切にしている。それに対して、ベテランになると子どもの得意を伸ばそうという意識が高まる様子がうかがえる。

全体に、教職経験年数が短い教員は、学校生活にとどまらず校外の生活も含めた広い範囲での指導を意識し、子どもの不得意な領域も含めて幅広い知識を教授することが重要と考えている。それに対して、年数を経るとともに、指導の範囲を学校生活に限定し、教育する内容を絞

ったり、子どもの得意な領域の力を伸ばしたりすることを強く意識するようになるようだ。

② 中堅教員が高い／低い項目

これまで、教職経験年数を重ねるとともに増加(もしくは減少)する項目をみてきた。そのような変化を示す項目のほかに、年数が「11～20年目」前後の中堅教員の数値が高い(もしくは低い)項目がいくつかある(図10-1-4)。経験年数が短いうちは低いが、中堅になると高まり、さらにベテランになると再び低下するような推移をたどる項目を、次に確認しよう。

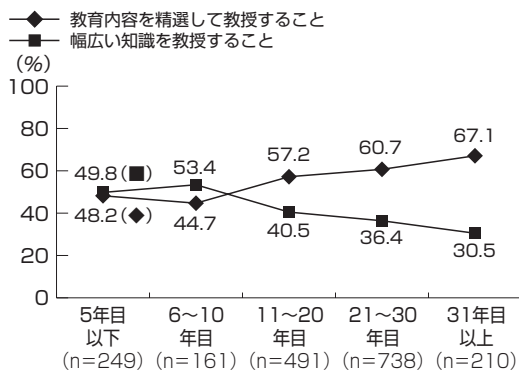
小学校教員も中学校教員もともに、「11～20年目」前後の中堅教員は、「授業の楽しさを多少犠牲にしても、学問的に重要なことがらを押さえること」を選択する比率が相対的に高い。その一方で、これと対になる「学問的に重要なことがらよりも、子どもが楽しく学べる授業にすること」は、「5年目以下」と「31年目以上」の教員が高い。この対と同様に、中堅教員は「一人前の大人になるために必要なことを教え、訓練すること」を選択する割合が相対的に高く、「子どもの持っている可能性が開花するのを、支援すること」を選択する割合は低めである。さらに、これら2対ほどは顕著ではないが、中堅教員は「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」を多く選択し、「一通り終わりでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」を選択する割合が比較的低い。

こうした数値の変化からは、経験年数で中堅に位置する教員が、楽しさよりも学問的に重要なことに重きを置き、必要なことはすべて教え、訓練してでもそれを身につけさせるべきだという意識を強くもっていることがわかる。中堅教員には、学校内で子どもたちの学力向上の中核を担う役割が求められると考えられる。そうした学校内での立場が、教育観に反映しているのかもしれない。

図10-1-3 教育観（小・中学校教員／教職経験年数別）

● 経験年数とともに増加／減少する項目

小学校教員



中学校教員

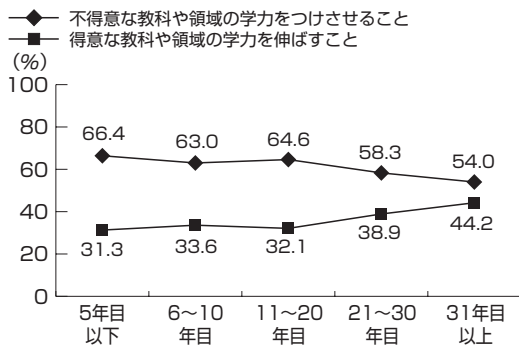
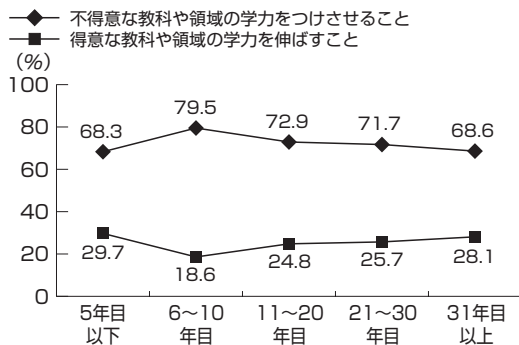
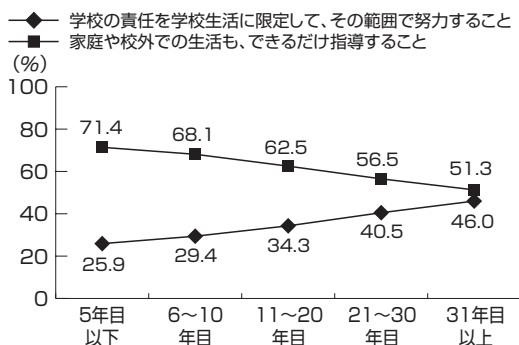
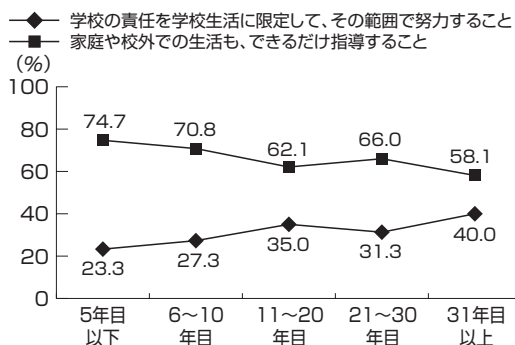
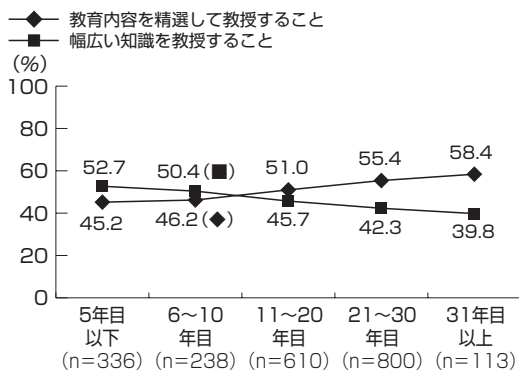
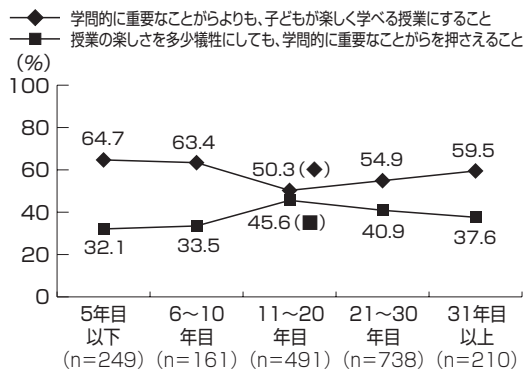


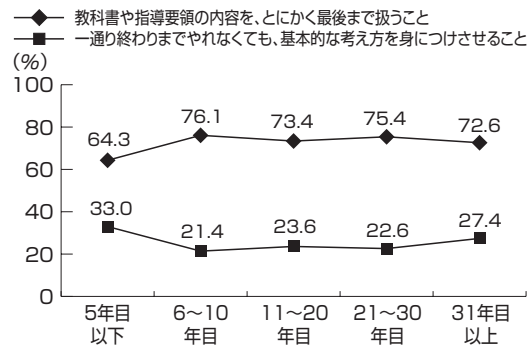
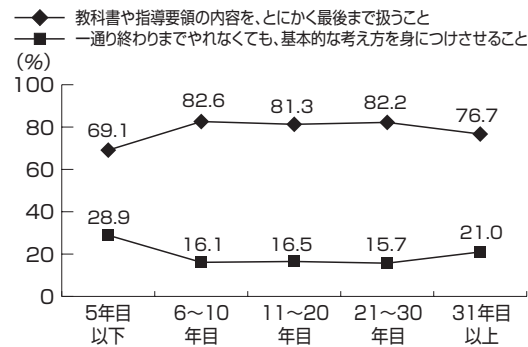
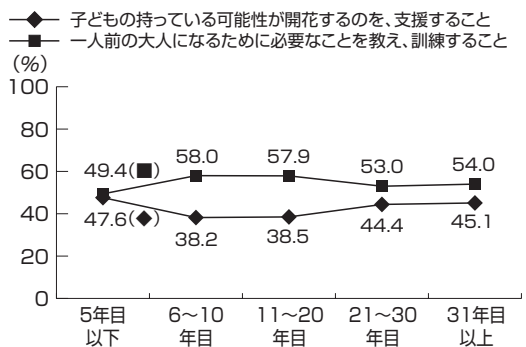
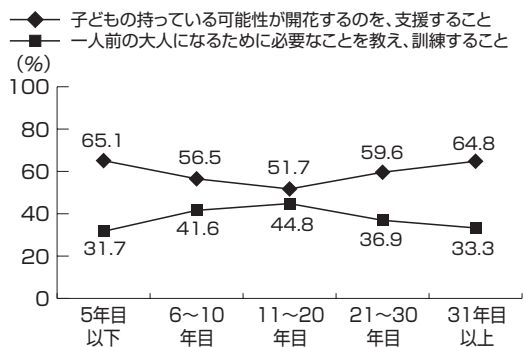
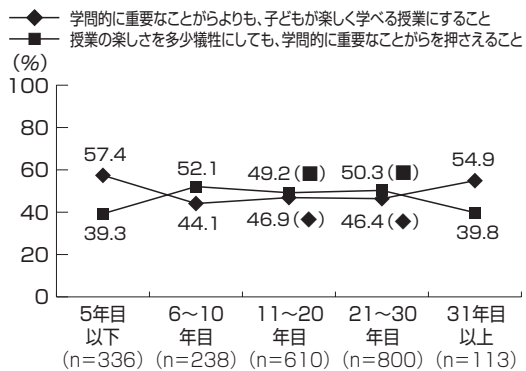
図10-1-4 教育観（小・中学校教員／教職経験年数別）

●中堅教員が高い／低い項目

小学校教員



中学校教員



小・中学校教員ともにPISAの認知率は4割程度である。しかし、知っている教員の9割は、そこで問われている力を学校教育で育てることについて必要だと感じている。中学校教員について担当教科別にみると、PISAを認知している割合やPISA型学力を意識した指導を実施する割合は、国語の教員がもっとも高い。

[Q13(教員)]

1) PISAの影響

本節では、OECD（経済協力開発機構）が実施している「OECD生徒の学習到達度調査:PISA」(Programme for International Student Assessment)に対する教員の認知や意識を検討する。PISAは、15歳児（日本では高校1年生）を対象として、2000年以降に3年のサイクルで実施されている。調査領域は、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野である。義務教育終了段階でもっている知識や技能を、実生活で直面する課題にどの程度活用できるか評価することを目的としている。生活場面で遭遇するような状況に関する課題文や図表などが問題に取り入れられているのが特徴である。2006年に実施された調査では、57の国と地域が参加した。

2000年、2003年、2006年と調査を重ねるごとに、参加する国・地域が増えており、順位や平均点などの推移を厳密にとらえることはできない。しかし、日本の順位が下がっているため、学力低下を裏づける1つの資料として用いられている。ちなみに、各回の日本の順位は、読解力8位→14位→15位、数学的リテラシー1位→6位→10位、科学的リテラシー2位→2位→6位となっている。2007年12月に、2006年調査の結果が発表されると、新聞やテレビなどのメディアは、

日本の子どもたちの学力低下の状況が依然として続いていることを大きく報道した。

文部科学省は、2003年調査の結果を受けた時点で、「我が国の学力は国際的に見て上位にあるが、読解力の低下など、最上位（世界トップレベル）とは言えない状況」であるとの認識を示し、学力向上のためのさまざまな施策を打ち出した。2005年10月に発表された中央教育審議会の答申『新しい時代の義務教育を創造する』のなかでも、子どもたちの学力の状況について、「国際的な学力調査の結果から、成績中位層が減り、低位層が増加していることや、読解力、記述式問題に課題があることなど低下傾向が見られた」と述べ、学習指導要領の理念を実現するための「具体的な手立てに関し、課題があると考えられる」と結論づけている。さらに、2008年1月に発表された答申『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』でも、2007年4月に行われた「全国学力・学習状況調査」の結果とともにPISAの結果が頻繁に引用されている。「学習指導要領改訂の基本的な考え方」の項では、「子どもたちの学力に関する各種の調査の結果は、いずれも知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等に課題があることを示している」として、「各教科の指導の中で、基礎的・基本的

な知識・技能の習得とともに、観察・実験やレポートの作成、論述といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させる」必要があると述べられている。活用力の育成を重視する指針の提示である。

このように、PISAの結果は、中央の教育行政において政策を判断する1つの根拠として、とても重視されている。

2) PISAに対する認知と意識

それでは、教員はPISAについてどの程度、知っているのだろうか。また、知っている場合、そこで問われている力を育てることが必要だと思っているのだろうか。今回の調査では、PISAの重要性が高まっていることもあって、そのことを教員にたずねてみた。なお、調査の実施は、PISA2006年調査の結果が発表された2007年12月以前であり、認知率については低めになる可能性があることに留意が必要である。

「あなたは、OECD（経済協力開発機構）が実施している『PISA』の調査内容や結果をどれくらい知っていますか」とたずねた結果を、**図10-2-1**（小学校教員）と**図10-2-2**（中学校教員）に示している。これをみると、小・中学校教員ともに、「よく知っている」という回答は5%程

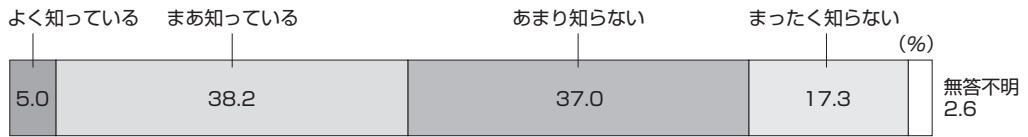
度ととても少ない。「まあ知っている」までを含めても、認知しているのは4割である。PISAの結果は教育行政では重視しているが、一般の教員の認知率は決して高いとはいえない。

しかし、「知っている」と回答した教員のほとんどが、そこで問われている力を学校教育で育てることについて必要だと感じているようだ。「よく知っている」「まあ知っている」と回答した教員に限って、「学校教育において、『PISA』で問われているような力を育てることは、どれくらい必要だと思いますか」とたずねた。その結果、小・中学校教員ともに、「とても必要だと思う」と「まあ必要だと思う」の合計は9割を超えている。

さらに、「『PISA』で問われているような力を育てる指導を、日ごろの授業のなかで行っていますか」とたずねた。小学校教員は、「よく行っている」7.9%、「ときどき行っている」60.7%という結果であり、7割弱が意識して指導しているようだ。ただし、「まったく行っていない」「あまり行っていない」という回答も3割程度いる。中学校教員は「よく行っている」と「ときどき行っている」の合計が54.9%で、小学校教員よりも10ポイント以上低かった。

図10-2-1 PISA調査について（小学校教員）

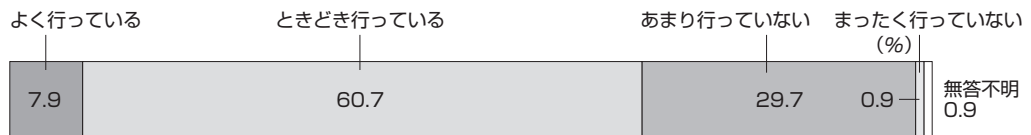
●認知（PISAの調査内容や結果をどれくらい知っているか）（n=1,872）



●必要性（PISAで問われている力を育てることはどれくらい必要だと思うか）（n=809）



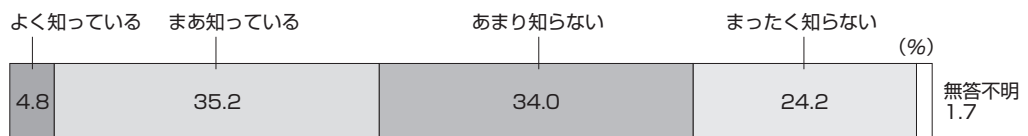
●実施（PISAで問われている力を育てる指導を日ごろの授業のなかで行っているか）（n=809）



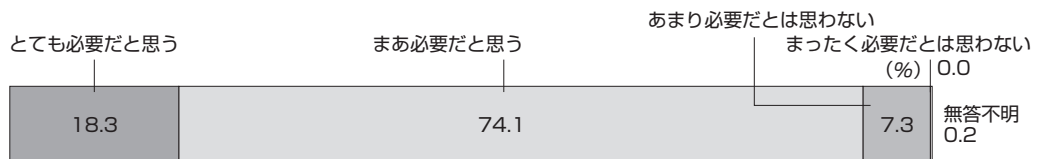
注) 必要性と実施については、認知についての設問で「よく知っている」「まあ知っている」と回答した教員のみになすねている。

図10-2-2 PISA調査について（中学校教員）

●認知（PISAの調査内容や結果をどれくらい知っているか）（n=2,109）



●必要性（PISAで問われている力を育てることはどれくらい必要だと思うか）（n=845）



●実施（PISAで問われている力を育てる指導を日ごろの授業のなかで行っているか）（n=845）



注) 必要性と実施については、認知についての設問で「よく知っている」「まあ知っている」と回答した教員のみになすねている。

3) 担当教科による認知と意識の違い

中学校教員は小学校教員に比べて、PISAで問われている力を育てるような、指導の実施率が低めである。これは、担当する教科によって指導の必要性が異なるといった事情が影響しているのかもしれない。そこで、担当教科による違いを、図10-2-3に示した。

これをみると、認知率がもっとも高い国語の教員ともっとも低い外国語の教員で、倍以上の差が開いていることがわかる。国語の教員は半数以上が認知しており、これに社会と理科の教員が4割台で続く。数学の教員は3割台の半ば、外国語の教員は2割台の半ばという結果である。ただし、認知している教員に限って指導の必要性をたずねると、担当教科を問わず9割前後が「とても必要だと思う」「まあ必要だと思う」と回答している。PISAについて知っている教員のほとんどは、そこで問われている力を伸ばす必要性を感じている。

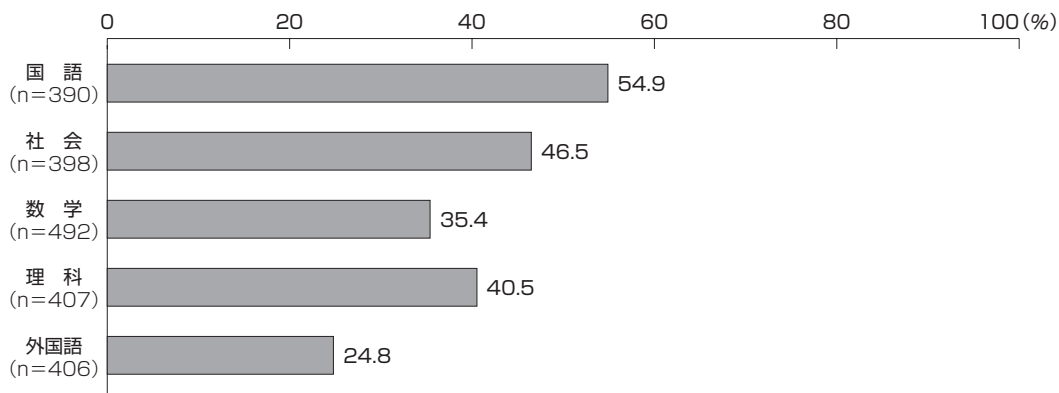
次に、そこで問われている力を伸ばす指導を実際にしているかどうかであるが、これは担当教科により違いが表れている。実施率がもっとも高いのは国語の教員で66.3%である。つづいて、社会、理科、数学の教員であり、もっとも

低いのは外国語の教員の45.6%で、国語の教員との間におよそ20ポイントの開きがあった。国語の教員がもっともPISAを認知しており、かつ、授業のなかでPISAを意識した指導をしている。

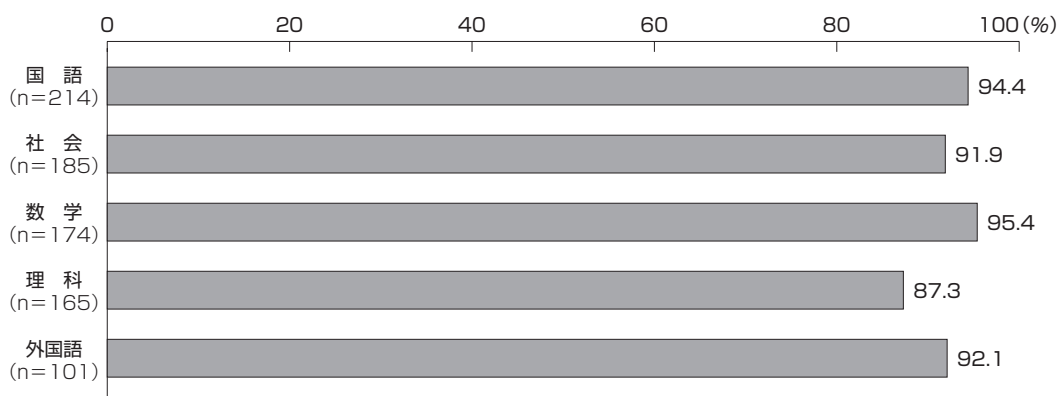
PISA2003年調査では、日本の読解力の順位が大幅に落ち込んでいた。そのこともあって、文部科学省は2005年12月に「読解力向上プログラム」を発表した。そのなかにも示されているように、PISAで測定される読解力は、国語の枠組みに収まるものではない。しかし、従来から行われている文学的文章や説明的文章の読解指導との関連を想定しやすいことや、同プログラムにおいて読書活動の支援充実を訴えていることなどから、国語の教員がもっとも情報に多く触れたり、その必要性を強く感じたりしたのであろう。とはいえ、いわゆるPISA型読解力で求められる情報の読み取りや自分の意見の表明などは、国語だけでなくそれぞれの教科や、教科横断的な取り組みのなかで指導される必要がある。この点からも、国語以外の教員への認知を高めたり、教材や指導法を開発したりすることを、今後考えなければならない。

図10-2-3 PISA調査について（中学校教員／担当教科別）

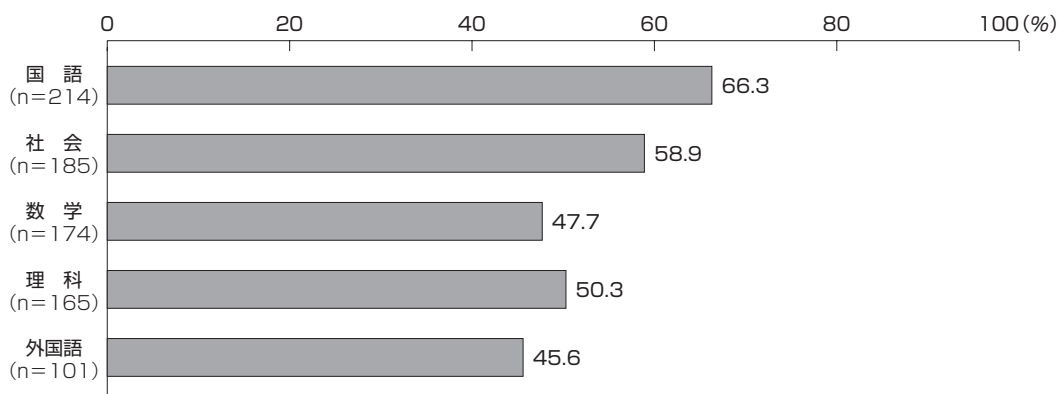
●認知（PISAの調査内容や結果をどれくらい知っているか）



●必要性（PISAで問われている力を育てることはどれくらい必要だと思うか）



●実施（PISAで問われている力を育てる指導を日ごろの授業のなかで行っているか）



注1) 認知の数値は「よく知っている」+「まあ知っている」の%。必要性の数値は「とても必要だと思う」+「まあ必要だと思う」の%。
実施の数値は「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

注2) 必要性と実施については、認知についての設問で「よく知っている」「まあ知っている」と回答した教員のみになぞっている。